

## 地域活性化シリーズ講演会記録(1)

### 「地域活性化と大学の役割ー地域連携機構の意義ー」

地域活性化学会会長 清成忠男



日時：2009年4月23日(木)16:30-18:10

場所：高知工科大学C102号室

地域連携機構は、地域活性化に向けての長期的取り組みの一部として、有識者を招いての講演会を年数回企画している。その第一回に本学の理事でもある清成忠男先生をお招きし、地域が抱える課題の構造と其中で必要とされる大学の寄与、とりわけ地域連携機構に寄せられる期待について語っていただいた。参加者は、県市議員、市町村長、県市町村職員、本学教職員、その他企業関係など109名、および本学マネジメント学部1年生91名の計200名に及んだ。

話題の前半は、経済のグローバル化や高齢化、地域間格差の拡大などの諸条件の中で高知県が直面する厳しい現実と、それを打開するためには企業誘致や公財政支出などの他力本願ではなく自ら新産業の創出をめざす活性化策が求められるなどの指摘。後半は、そこから導かれる新たな大学の役割ということについてであった。

とくに新産業の創出という場合、ここ十数年ほどは科学技術イノベーション一辺倒であったが、人々のライフスタイルの革新も視野に入れた多様なイノベーションが考えられるべきであり、生産技術から消費生活にいたる有機的連関の中での新規創業が求められるという。その際、何をもって地域固有の資源と見るかが重要で、土地の標高差でさえも植生の多様性を含むがゆえに資源と見ることができる。つまり、資源は利用されてはじめて資源となるのであり、その掘り起こしが必要という指摘である。

点在する資源を掘り起こし、これらを有機的につなぎ合わせて、地域の新たなビジョンをデザインし、地方自治体に政策提案をしていくことが地域の「知の拠点」として大学が担うべき新たな公共性ともいえる。ゆえに、高知工科大学が公立大学法人化の一環として地域連携機構を発足させた意義は大きい。

以上のようなお話をいただいた上で、しかし、組織づくりはあくまで端緒であり、これから具体的な活動を通して、本学が新たな大学の役割を示すモデルとなることに期待したいという励ましをいただいた。(文責：地域連携機構事務室)